やまなし医療最前線

県立中央病院から〈251〉

嗅覚障害伴う難治性副鼻腔炎
新注射薬 副作用減らす

鼻づまりや鼻水といった症状が出る慢性副鼻腔炎の中には、従来の薬での治療や手術を行っても再発する好酸球性副鼻腔炎がある。近年この難病に対する新たな注射薬が広がり始めていて、山梨県立中央病院耳鼻咽喉科の堀内辰也医師は「従来の薬で懸念されていた副作用を減らすことにつながっている」と解説する。

堀内辰也
耳鼻咽喉科医師

鼻は嗅覚器官であるとともに、肺に出入りする空気の主な通り道。その途中にある空洞が副鼻腔で、長期間この空洞に炎症が続く状態が慢性副鼻腔炎と呼ばれる。

慢性副鼻腔炎の手術は、鼻から内視鏡を入れて道中のポリープを除去し、副鼻腔の入り口を広げる。耳鼻咽喉科では一般的に行われていて、2021年1月～22年6月に同院が実施した鼻の手術計67件のうち、副鼻腔炎関連は50件と74・6％を占める。

真菌（カビの一種）や風邪が副鼻腔炎の原因となることもあるが、好酸球性はアレルギー性の副鼻腔炎。鼻水などに加えて嗅覚障害で食べ物の味が分かりにくくなる特徴があり、日常生活で不便を感じる患者は少なくないという。

厄介なのは手術をしてもそのままでは元に戻ってしまうことだ。根治療法が確立されていないために難病に指定されていて「ほかの副鼻腔炎と異なり手術後も長期的な視点での治療が欠かせない」（堀内医師）。

標準治療としては鼻の奥にステロイドを直接スプレーで吹きかけて炎症を抑える方法がある。それでも症状がコントロールできない場合は飲み薬のステロイドを用いるが、長期の服用によって骨がもろくなるほか、感染症にかかりやすくなるため、慎重に用量を見極める必要があった。

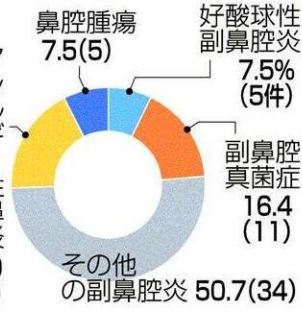
新たに登場した注射薬は「デュピクセント」と呼ばれる。この注射薬はステロイドを服用しても症状が改善しない、長期に改善状態を維持できない場合に使用する。

同院では昨年から導入。堀内医師は「人によってはステロイドの服用をゼロにすることも可能。患者からは『ステロイドの副作用の心配がなくなった』と安心する声が聞かれる」と話す。

注射は2週間に1度。医師から指導を受けた後はインスリンのように自ら注射できるのもメリットだという。「毎日服用するステロイド薬と比べて負担が軽い」と話している。

＝第2、4木曜日に掲載します

山梨県立中央病院 鼻の手術の内訳（2021年1月～22年6月）



掲載日：2022年07月14日／ぶんくら／紙面頁012
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社